

高等学校教育と大学教育の連携

学校長 加納 幹雄

小中連携・中高連携・高大連携ということばがある。これらが意味するところは、それぞれの学校段階の教育内容を当該学校だけで考えるのではなく、最も近い異校種の学校まで視野に入れて児童・生徒を育成しようという考え方である。

例えば、小学校で「外国語活動」や「教科としての英語」が行われるときには、その目標が中学校の教科の目標に照らしてどのように接続していくのかといった課題意識をもつ関係者が多い。小学校で培った資質・能力が、中学校になったときにどのように発展的に育っていくのだろうか。自分の教えたことは大丈夫だったのだろうかという責任感やこの子の力が中学校ではどのように伸びていくのだろうかという期待感があるからである。同じように、中学校から高等学校、高等学校から大学へとこの考え方は継続されていくはずである。

ところが、金沢大学に入学してきた大学1年生に英語の授業を行うと、大学に入学するという目標が達成された瞬間に、初等中等教育をつないできた芯が突然に消滅するのではないかという後ろ向きの印象をもつ。「大学に入ってからどのような本を読みましたか?」「大学での勉強は、あなたの力を拡大していますか?」などといった質問に、返ってくる返事は、ほとんどの場合が、たいへん消極的である。つまり、高校時代の勉強の勢いがどこかに拡散して消滅してしまっているようである。高等学校及び大学は、こうした実態を相互に把握しているかである。

日本の国民の学力の伸長を考えたときに、大学1年生における「思考の停滞」は、とても深刻な状況にあると思われる。時代や社会は、大きな変化と変革を要求され、以来、多くの民間会社は、その意識の改革と同時に体制の改革も行ってきた。しかしながら、大学入学試験に合格した途端に、急速に萎んでいく日本型学習システムは、依然として変わらないままである。この日本型学習システムにメスを入れるべく本学の学校教育学類では、「教師になるためのノート」と称して、4年間の連続した自律的な学習の支援システムを導入している。ところが、私の知る限りこの自律的な支援システムについて、学生たちは多くの小学校から高等学校において行なわれている「柔らかくて・かみやすく・すぐに手に入り・かゆいところにも手が届く授業サプリメント（プリント）」と同じ性格に位置づけ、待ち続けているのではないかと心配になる。つまり、このノートは本学型の自律支援システムであるはずが、またしても与えられる「サプリメント」化し、どこまで行っても、自律支援システムは機能不全を起こしているのではないかと危機感である。

「高等学校は、生涯にわたり自律的に学びを深め広げる種を育てている実感がありますか。」また、同時に大学では、「入学後からすぐにその高校が育てた種を育てている実感がありますか。」万が一こうした質問に、高等学校も大学も即座に答えられないとするなら、すでに、日本は、世界的な広がりで急速に進んでいる社会・経済・政治・科学・工学・医学などあらゆる分野の改革に追いついていないことになり、社会からの批判は免れない。

校務が重なる中で、本紀要に投稿された先生方に敬意と感謝を申し上げたい。